

琉球大学学術リポジトリ

頭文字語は何の略か：英語略語の理解度と誤認の法則に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2022-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高良, 宣孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017906

頭文字語は何の略か：英語略語の理解度と誤認の法則に関する一考察

高良 宣孝

1 はじめに

私達の周りでは多くの英語の略語が使用されている。例えば、今筆者はこの文章を PC (= **P**ersonal **C**omputer) で執筆しており、論文関連の様々な資料は USB (= **U**niversal **S**erial **B**us) メモリに保存されている。目の前にはクラシックの CD (= **C**ompact **D**isc) があり、また部屋に置かれたカレンダーの曜日は SUN (= **S**unday)、MON (= **M**onday)、TUE (= **T**uesday) のように全て 3 字で省略されている。このように私達の身の周りには色々な英語の省略形が溢れている。

では、私達は身の周りに溢れている「英語略語」をどの程度正しく理解できているのだろうか。この疑問が湧いてきたのは、筆者が同僚と一緒に沖縄県内の小・中学生、高校生、及び一般の方向けに行なっている異文化・自文化の楽しさを広める講演の準備を行なっている時であった。普段から目にしている DVD という語が“Digital Versatile Disc”であることをその時初めて知ったのである。それまでは“Digital Video Disc”であると疑いもせず辞書で確認したことすらなかった。数名の同僚に「DVD は何の略か」と質問してみると、そのほとんどが筆者と同じく“Digital Video Disc”と回答した。つまり、“V = Video”というパターンが見られたのである。この事実を目の当たりにして、「実は多くの人々が英語略語を正しく理解できていないのではないか」という疑問に加え、「仮に英語略語が誤認されている場合、その誤認に何らかの法則性が見られるのではないか」というさらなる疑問が生まれたのである。

上記の疑問を解決すべく、2016 年にアンケート調査を行なった。今回の研究はパイロット・スタディとして行ない、まずこの調査から得られたデータを

分析しその特徴をまとめ、誤認回答が示唆している法則をまとめる。また今回のアンケート調査を行なって見えてきた改善点についても触れながら、今後の研究計画についてまとめる。

この研究ノートの構成は以下の通りである。まず第2節では実際に行なったデータ収集方法やアンケート調査への参加者に関する情報をまとめる。第3節では、今回のアンケート調査の集計結果をまとめ、第4節では集計結果の詳細な分析と分析結果が示唆する特徴、特に誤認回答の特徴について考察を行なう。第5節では分析・考察のまとめを行なうと共に、パイロット・スタディで見えてきた改善点を示し、今後の研究計画について述べる。

2 アンケート調査及び協力者

この節では、アンケート調査方法とアンケート調査への参加者についてまとめる。まずこのアンケート調査は、2016年に筆者の本務校（A大）及び非常勤講師として勤務していた私立大学（B大）で担当していた大学生を対象に行なわれたものである。¹アンケート調査はアンケート用紙を用いて行なわれた。調査内容は大きく3つに分かれ、初めに学生の年齢・専門領域・第一言語といった基本情報を確認し、次に英語略語に関する質問を行なった。²英語略語のアンケートはさらに2種類に分かれ、1つは頭文字語（acronym）について、もう1つが略語（clipped word）についてのアンケートであった。今回の研究ノートでは、頭文字語にのみ焦点を当てる。

頭文字語に関するアンケート調査では、(i) CM (= Commercial Message)、(ii) SD (card) (= Secure Digital (card))、(iii) TV (= Television)、(iv) DVD (= Digital Versatile Disc)、(v) GPS (= Global Positioning System)、(vi) UFO (= Unidentified Flying Object)の6語を用いた。この6語を選んだ理由としては、調査対象となる大学生のほとんどが比較的なじみのある語であるだろう、と筆者が想定したからである（アンケート作成協力者の幸知さんにも大学生がこれらの語を分かるとするか確認を行ない、最終的に筆者の責任で決定した）。DVDの別の解釈の可能性や本稿での取り扱いを含めた上記の語の詳細な議論は次節で行なう。

解答方法は記述式で、英語またはカタカナで記述してもらった。その際、英単語のスペルの間違いは特に気にする必要がないことも参加者には伝えた。まず例題として CD を示し、その後実際の問題として上記の 6 語を出題した。出題方法としては、1 枚の用紙に 1 語ずつで、さらに各語とも写真・イラストとセットで提示した。これは、その語が実際に何を指しているのかを明確にし、不必要な誤解を避ける為である。このうち、GPS は写真・イラストでは示しづらかった為、GPS 機能を用いているカーナビゲーションの画像とセットで提示し、GPS が意味するものを出来る限り明示するよう試みた。

例題を確認する段階で解答後前のページに戻らないように指示を出した。これは、後に続く問題の回答の影響で既に回答済みの語の解釈が変わってしまうことを避ける為である。またアンケート用紙の作成の際は、上記の語の順番を変え 2 種類作成した。これは、隣で回答している参加者の回答の影響を極力排除する為である。一方の語順は【DVD → SD (card) → UFO → TV → CM → GPS】とし、もう一方の語順は【UFO → TV → SD (card) → CM → DVD → GPS】とした。

次にアンケート調査の参加者について述べる。参加者数は 144 名（A 大＝118 名、B 大＝26 名）である。本務校である A 大での担当講義が B 大と比較して多かった為に A 大の参加者数が B 大の約 4.5 倍となっている。参加者の基本情報の一部をまとめたのが表 1 である：

1. 年齢層	10 代＝27 名、20 代＝114 名、30 代＝1 名、50 代＝1 名、60 代＝1 名
2. 専門	英語＝104 名、日本語＝23 名、英語以外の外国語＝2 名、その他（語学以外）＝15 名
3. 第一言語	日本語＝142 名、広東語＝1 名、バイリンガル＝1 名

表 1 アンケート調査参加者の基本情報のまとめ

参加者は、1 名を除き全員大学生である。30 代の参加者は大学の公開講座を受

講している一般の社会人である。³また 50 代と 60 代の参加者は社会人入学の夜間生の学生である。また、当時本務校で担当していた講義のほとんどが専門科目の講義であったため、約 7 割の学生が英語を専攻とする学生となった。本来であれば、表 1 で示した情報や参加者の専門、表 1 では省略した英語学習歴・1 日の英語使用時間といった参加者の特性と回答結果に相関関係が見られるのかも検討する必要があるが、今回のパイロット・スタディでは割愛し今後の研究で検討するものとする。

3 調査結果

この節ではアンケート調査の結果とその特徴をまとめる。まず前節でも示したアンケート参加者の回答の正誤を判断する基準となる 6 語の省略前の形を表 2 に再掲する：

頭文字語	省略前の形
1. CM	<u>C</u> ommercial <u>M</u> essage
2. SD (card)	<u>S</u> ecure <u>D</u> igital (card)
3. TV	<u>T</u> ele <u>v</u> ision
4. DVD	<u>D</u> igital <u>V</u> ersatile <u>D</u> isc
5. GPS	<u>G</u> lobal <u>P</u> ositioning <u>S</u> ystem
6. UFO	<u>U</u> nidentified <u>F</u> lying <u>O</u> bject

表 2 頭文字語とその省略前の形

今回のパイロット・スタディでは、回答が表 2 の各語句と一致する場合は正解とした。但し、今回は正しい英語のスペルで記述できるかを問う調査ではなかった為、スペルの誤りは問題とせず正解とした。また、名詞が複数形になっている場合（例えば Messages）も正解とした。但し GPS の P に関して、接尾辞の“-ing”がない場合（“Positioning”ではなく“Position”）は不正解とした。

上記の頭文字語の内 DVD に関しては、文献によっては表 2 で示した省略前の形以外の形が掲載されていることがある。例えば堀内（2013, p. 889）や南出

(2014, p. 660) では、“Digital Versatile Disc”の他に“Digital Video Disc”も正しい形としている。また篠崎 (2006, p. 126) は、日本語では「デジタル＝ビデオディスク」としているものの英語では“Digital Versatile Disc”のみを挙げている。一方で Maxell のホームページでは DVD が“Digital Versatile Disc”の略であると明言している。また BohYoh.com では“Digital Video Disc”を通称とし、その使用は適切ではないと述べている。さらに「パソコンの選び方と買い方」というホームページでは DVD に関するいくつかのホームページの情報を紹介しているが、DVD が当初は「映画を再生できるメディア」という目的から“V = Video”であったが、実際には様々な用途に使用されることから“V = Versatile”と変更され、これが現在名称として採用されている、ということが説明されている。以上のことから判断し、本研究では DVD が表す省略前の形は“Digital Versatile Disc”のみとし、“Digital Video Disc”は不正解として扱う。

また CM に関して、南出 (2014, p. 422) では“commercial”を名詞扱いとし“commercial message”で言い換えられる (または同義語である) としている。しかし、多くの文献で CM の省略前の形が“Commercial Message”であり、M が“Message”の“M”である (つまり“commercial”の“m”ではない) としている。このことから名詞の“commercial”は“commercial message”から派生した省略語であると考えられることが出来る為、本研究では CM に対する回答が“commercial”である場合は不正解としている。

以上の基準を用いて出した各語に対する回答結果をまとめたのが表 3～8 である。各表では実際の回答とその人数を示すが、語によっては約 90 のパターンが出たものもある為、各表では①正解とする回答、②複数名が回答したものの、③無回答、の 3 つのカテゴリのみを示す。但し、次節において回答者が 1 名ではあるものの、分析において重要となる回答は示して説明を行なう。回答結果は参加者の回答の表記が英語表記・カタカナ表記に関わらず基本的には全て英語で示す。また、スペルが間違っている場合は実際に回答者が意図していると考えられる語句に変えて表記する。各表において下線付きの太字は頭文字語の各文字を示している。また表内のクエスチョン・マークは、その文字に対応する語のみ無回答であったことを示す。

表3～5では2字の頭文字語の回答パターンについてまとめる。表3はCMに対する回答をまとめた表である。無回答を含めて全部で12パターンの回答が見られた。表3では回答者が1名のみパターンを除く計6パターンを回答者の多い順に示す。

回答	回答者数
1. <u>c</u> ommercial (または <u>c</u> ommercial)	113
2. <u>c</u> ommercial <u>m</u> essage	8
3. <u>c</u> ommercial <u>m</u> edia	8
4. <u>c</u> ommercial <u>m</u> ovie	5
5. <u>c</u> ommercial <u>m</u> arketing	2
6. 無回答	2

表3 CM (= Commercial Message) に対する回答のまとめ

表3の結果、全体の約78.5%（小数第2位を四捨五入、以下同様）がCMをcommercialと解釈しており、Mを“commercial”内の“m”と解釈している。これは、“CoMercial”や“Commercial”といった回答が見られたという事実からも明らかである。一方で正解者はわずか8名で全体の約5.6%という結果である。また、6語の中で最も無回答数が少なかったのがこの語である。CMの各文字に関する詳細な分析・考察は次節で行なう。

表4はSDに対する回答をまとめた表である。無回答を含めて全部で49パターンの回答が見られた。これは2字の頭文字語では最も多い。表4では回答者が1名のみパターンを除く計13パターンを回答者の多い順に示す。

回答	回答者数
1. <u>s</u> mall <u>d</u> isc	38
2. <u>s</u> mart <u>d</u> isc	22
3. 無回答	18
4. ? <u>d</u> isc	10

5. <u>s</u> mall <u>d</u> evice	3
6. <u>s</u> oft <u>d</u> isc	3
7. <u>s</u> mall <u>d</u> ata	2
8. ? <u>d</u> ata	2
9. <u>s</u> ocial <u>d</u> isc	2
10. <u>s</u> ave <u>d</u> evice	2
11. <u>s</u> ave <u>d</u> ata	2
12. <u>s</u> aving <u>d</u> isc	2
13. <u>s</u> ecret <u>d</u> ata	2

表4 SD (card) (= Secure Digital (card)) に対する回答のまとめ

SD (card) に関しては、正解となる“Secure Digital (card)”を答えた学生は1人もいなかった。また無回答数が18と2字の頭文字語の中では最も多い。このことから、SD (card) そのものは知っていてもそれが何の略語であるかはほとんど知られていないことが伺える。一方で、38名の学生が“small disc”、22名の学生が“smart disc”と回答したという興味深い特徴も見られた。また表4からは、Dを“disc”、“data”、“device”と解釈する傾向が見られる。SDの各文字に関する詳細な分析・考察は次節で行なう。

表5はTVに対する回答をまとめた表である。無回答を含めて全部で15パターンの回答が見られた。表5では回答者が1名のパターンを除く計3パターンを回答者の多い順に示す。

回答	回答者数
1. <u>t</u> elev <u>i</u> sion	100
2. <u>t</u> ele <u>v</u> ision (または TeleVision)	28
3. 無回答	4

表5 TV (= Television) に対する回答のまとめ

表5から言えることは、128名の学生（全体の約88.9%）がTV = television という認識を持っているということである。より正確に述べると、100名がTVを“television”と1語として回答し、一方で28名が“tele”と“vision”と別々の語ととらえている傾向が見られた。上記のことから、ほとんどの学生がTVを“television”の略であることを理解していることは明らかである。TVの各文字に関する詳細な分析・考察は次節で行なう。

表6～8では、3字の頭文字語の回答パターンについてまとめる。表6はDVDに対する回答をまとめた表である。無回答を含めて全部で41パターンの回答が見られた。これは3字の頭文字語の中で最も少ない。表6では回答者が1名のパターンを除く計15パターンを回答者の多い順に示す。

回答	回答者数
1. <u>d</u> igital <u>v</u> ideo <u>d</u> isc	54
2. <u>d</u> rive <u>v</u> ideo <u>d</u> isc	11
3. 無回答	13
4. ? <u>v</u> ideo <u>d</u> isc	9
5. <u>d</u> igital <u>v</u> ersatile <u>d</u> isc	5
6. <u>d</u> ubbing <u>v</u> ideo <u>d</u> isc	4
7. <u>d</u> ubbing <u>d</u> isc	4
8. <u>d</u> igital <u>v</u> isual <u>d</u> isc	3
9. <u>d</u> igital <u>v</u> ision <u>d</u> isc	3
10. <u>d</u> igital <u>v</u> irtual <u>d</u> isc	2
11. <u>d</u> ata <u>v</u> isual <u>d</u> isc	2
12. <u>d</u> irect <u>v</u> ideo <u>d</u> isc	2
13. ?? <u>d</u> isc	2
14. <u>d</u> evice <u>v</u> ideo <u>d</u> isc	2
15. <u>d</u> isc <u>v</u> ideo <u>d</u> evice	2

表6 DVD (= Digital Versatile Disc) に対する回答のまとめ

表 6 から分かることは、第 1 に 54 名（全体の 37.5%）の学生が DVD を“digital video disc”と認識していることである。一方で DVD を“digital versatile disc”と認識している学生はわずか 5 名（全体の約 3.5%）しかいない。また DVD の各文字に焦点を当てると、V を“video”、2 番目の D を“disc”と解釈している傾向が強く表れている。DVD の各文字に関する更なる詳細な分析・考察は次節で行なう。

表 7 は GPS に対する回答をまとめた表である。無回答を含めて全部で 91 パターンの回答が見られた。これは 3 字の頭文字語の中で最も多い。表 7 では回答者が 1 名のみパターンを除く計 16 パターンを回答者の多い順に示す。

回答	回答者数
1. 無回答	31
2. <u>g</u> lobal <u>p</u> ositioning <u>s</u> ystem	5
3. <u>g</u> lobal <u>p</u> lace <u>s</u> ystem	4
4. <u>g</u> lobal <u>p</u> osition <u>s</u> ystem	3
5. <u>g</u> eographic <u>p</u> lace <u>s</u> ystem	3
6. <u>g</u> eographic <u>p</u> oint <u>s</u> earch	3
7. <u>g</u> lobal <u>p</u> ositioning <u>s</u> ervice	2
8. <u>g</u> lobal <u>p</u> lace <u>s</u> earch	2
9. <u>g</u> lobal <u>p</u> lacement <u>s</u> ystem	2
10. <u>g</u> eographic <u>p</u> osition <u>s</u> ystem	2
11. <u>g</u> eographic <u>p</u> oint <u>s</u> ystem	2
12. <u>g</u> rand <u>p</u> osition <u>s</u> ystem	2
13. <u>g</u> uide <u>p</u> osition <u>s</u> earch	2
14. ? <u>p</u> oint ?	2
15. ?? <u>s</u> ystem	2
16. ?? <u>s</u> ervice	2

表 7 GPS (= Global Positioning System) に対する回答のまとめ

まず表7から分かることは、無回答数が非常に多い（全体の約21.5%）ことである。一方でGPSを“global positioning system”と正しく認識出来ている学生はわずかに5名（全体の約3.5%）である。またGPSの各文字に焦点を当てると、Sを“system”と解釈している傾向が見られるようだ。GPSの各文字に関する更なる詳細な分析・考察は次節で行なう。

最後に表8はUFOに対する回答をまとめたものである。無回答を含め全部で63パターンの回答が見られた。これは全体で2番目に多い。表8では回答者が1名のみのパターンを除く計12パターンを回答者の多い順に示す。

回答	回答者数
1. 無回答	45
2. <u>u</u> nknown <u>f</u> lying <u>o</u> bject(s)	12
3. <u>u</u> nidentified <u>f</u> lying <u>o</u> bject	9
4. <u>u</u> n <u>f</u> ound <u>o</u> bject	5
5. <u>u</u> n- <u>f</u> lying <u>o</u> bject	5
6. <u>u</u> n-? <u>o</u> bject	4
7. <u>u</u> ncertain <u>f</u> lying <u>o</u> bject	3
8. <u>u</u> n-identify <u>f</u> lying <u>o</u> bject	2
9. <u>u</u> nknown <u>f</u> ly <u>o</u> bject	2
10. <u>u</u> niversal <u>f</u> uture <u>o</u> bject	2
11. <u>u</u> n- <u>f</u> lying ?	2
12. <u>u</u> nrecognized <u>f</u> lying <u>o</u> bject	2

表8 UFO (= Unidentified Flying Object) に対する回答のまとめ

まず目につくのが、無回答者数の多さ（全体の約31.3%）で、これは調査を行なった6語の中で最多である。一方正解者数は9名（全体の約6.3%）である。またFを“flying”、Oを“object”と認識している傾向が伺える。UFOの各文字に関する詳細な分析・考察に関しても他の語と同様に次節で行なう。

4 分析及び考察

この節では前節の結果を踏まえ、アンケート調査に協力してくれた大学生がどのように頭文字語を理解しているのかを分析・考察する。4.1 節では各頭文字語の正答率についてまとめ、大学生の理解度について考察する。一方、4.2 節及び4.3 節では、学生による頭文字語の各文字の解釈の特徴を分析し、その傾向を調べ頭文字語の解釈方法について考察する。

4.1 正答率から見える大学生の頭文字語の理解度

3 節では、アンケートに答えた大学生が6つの頭文字語（CM、SD、TV、DVD、GPS、UFO）をどのように解釈しているのかを統計的にまとめた。表9は表3から表8の結果を基に各語の正解率をまとめたものである：

頭文字語	正答率	頭文字語	正答率
CM	8 (5.6%)	DVD	5 (3.5%)
SD	0 (0%)	GPS	5 (3.5%)
TV	128 (88.9%)	UFO	9 (6.3%)

表9 各頭文字語の正答率

表9から明らかなように、TVを除く5語の正答率が非常に低く、SDに関しては正解者が1人もいない。一方で、最も正答率の高いTVでも16名が誤答または無回答であったことが分かる。以上のことから、頭文字語が何の略なのかに関しては、その理解度はかなり低いものと言えそうである。

一方で、前節でも軽く触れたが、頭文字語の各文字の解釈に焦点を当てて質的・量的な分析を試みると、非常に興味深い傾向が見られる。4.2 節では2字の頭文字語について、4.3 節では3字の頭文字語について分析・考察を行なう。

4.2 2字の頭文字語の分析・考察

初めにCMに関して考察すると、8割弱の学生がCMを“commercial”と解釈し、各文字が1語に含まれていると解釈している。これは、CMを日本語で

「コマーシャル」というカタカナ語で使用していること、また英和辞書でも“commercial”を名詞としてとらえ「コマーシャル」の日本語訳を付していることに影響されている可能性が高い。

次にSDについて分析・考察を行なう。初めに、Sに関して最も多く現れた単語が“small”で47名（全体の約32.6%）である。CDやUSBメモリ、ポータブルHDDといった記録メディアの中でSD cardは薄く小さい部類の媒体と言える。このSD cardのサイズに着目した場合“S = small”という連想は十分に起こり得ると言える。またSを“square”や“slim”と解釈しているケースも1例ずつ見られた。この3つに共通しているのはSD cardの形状（小ささ・正方形に近い形・薄さ）であり、その特徴と名前との間に関連性を見出していると考えられる。一方Sを“smart”と考えた回答者も多く24名（全体の約16.7%）いた。“smart”には「高性能の、ハイテクの」という意味があり、他の記録メディアと比べて小さくて薄い形状でありながら大容量のデータを保存できるSD cardの性質から“S = smart”という語を連想するのは十分に考えられることである。同様に“sophisticated”（「洗練された、高機能の」）が1件、“super”（「素晴らしい、一流の」）が3件回答として挙げたことも考慮すると、多くの人がSD cardの性質（高機能性）を名前と関連付けているとも考えられる。さらにSの回答として、“storage”が3件、“storing”が1件、“save”が5件、“saving”が3件、合計12件の回答があり、これらの語が持つ共通点はSD cardの基本的な機能である「データの記録・保存」である。さらに1件だけであるが“D = deposit”という回答も見られ、これも「データの記録・保存」という基本的な機能を表している。このことから、回答者はSD cardの機能と名前との間に関連があると考え回答していると予想できる。

次にSDのDに関して最も特徴的な点が、144名中93名（約64.6%）が“disc”と答えていることである。これはFD (= floppy disk)、CD (= compact disc)、DVD (= digital versatile disc) のDが“disk/disc”であり、これらが同じ記録メディアであることから、“D = disc”という連想が起こっているものと考えられる。その他にも、Dの回答を“device”（9名）や“data”（16名）とするケースもあり、「データ」の記録・保存に関わる「道具」と解釈しいずれかの語を当て

ていることが予想できる。

最後に TV について分析・考察する。全体で最も高い正答率の TV だが、T に着目すると 129 名 (約 89.6%) の参加者が T を“tele”と回答し、V に関しても“vision”と回答したのは 132 名 (約 91.7%) という結果であり、部分的であったとしても他の語に比べて圧倒的に正しく理解できていることが分かる。

一方で T に関しては“televi” (“televivision” と “televivideo” の計 2 名)、“television” (“television video” の 1 名) のように“television”との関連は理解していると思われるものの T の表す部分が何か正しく理解できていないケースがわずかながら見られた。前者は「テレビ」という和製英語の影響も十分に考えられる。V に関しては“vision”以外に“video” (5 名) という回答が見られた。これは「テレビ」と「ビデオ」のつながりから連想された可能性も考えられる。

4.3 3 字の頭文字語の分析・考察

初めに DVD の各文字への回答を分析しながらその特徴を考察する。1 つ目の D に関して、“digital”と回答した人数は 70 名で全体の約 48.6% と最多である。約半数の人が正しい認識を持っていると言える。特に興味深い点は 2 つ目の D を“digital”と回答した人はいなかったことである。次に多かったのが“drive” (“drive record”を含む) で 14 人だった。

少数派ではあるものの 1 つ目の D の回答として興味深い回答が得られた。それは“dubbing” (8 名)、“downloaded” (1 名)、“data” (3 名)、“document” (1 名)、という語である。“dubbing”に関しては、“dubbing video disc” (4 名) と “dubbing disc” (4 名)、そして“downloaded”に関しては“downloaded video disc”という回答が得られた。また“data”に関しては、“data visual disc” (2 名) と “data view disc” (1 名)、そして“document”は“document vision disc”、という回答だった。これらから推測できる点は、DVD を「データや動画を保存・コピーし閲覧するための記録メディア」と認識しているということである。特に“dubbing disc”と後半の 3 つの例は DVD を動画以外のデータ (文書、写真、音楽等) の保存・コピーにも使用する可能性を示唆していると考えられる。

次にVに関する分析・考察を行なう。Vが表す語として正しいとされる“versatile”がわずかに5名なのに対して、その約20倍の98名(約68.1%)がVを“video”と回答していることが最大の特徴と言える。3節でも触れた歴史的な経緯により“digital video disc”が通称となったようだが、それをそのまま掲載している辞典が存在することが理由の1つとして考えられる。またレンタルビデオショップでのDVDの普及も大きな要因と言えるだろう。DVDが普及する以前は“VHS (= Video Home System) video”が貸し出されていたが、それが薄くて劣化しにくいDVDに移行していった。その過程でDVDを“VHS video”の後継と考えること自体自然であり、語彙的に難しい“versatile”ではなくそのまま従来の“video”と結びつけた結果、DVDを“digital video disc”と連想していると考えても不自然ではない。⁴

2つ目のDに関する最大の特徴は、119人の回答者が“disc”と答えていることだろう。これは全体の約82.6%にあたる。元々“disc”が「薄い円盤状のもの」という意味で、DVDの形状もまさに「薄い円盤状」であることから、容易に連想できたのではないかと考えられる。

次にGPSの各文字について分析・考察を行なう。GPSは6語の中で最も多くのパターンが見られたが、それでもいくつか興味深い特徴を見ることが出来る。まずGに関して、正解となる“global”と回答したのは29名である。「地球規模の」と訳せるこの語はGPSにおける「地理的」な内容を示唆している。この「地理的」というキーワードを基に回答者の回答をより詳細に分析すると、実に多くの「地理的」な内容を含む語が出てくるのが分かった。1つは“geography”(7名)とその派生形である“geographic”(19名)、“geographical”(4名)である。また、“ground”(6名)という回答も見られた。これら「地理的」な内容を持つ単語の回答数は36となり、“global”の回答数と合わせると65となる。⁵GPS自体が「地球上の現在位置を測定する為のシステム」であることから、「地理的」な内容を示す語句が自然と連想される可能性は高い。一方で、Gを“get”(3名)、“getting”(1名)、“going”(2名)、“guide”(13名)、“guiding”(1名)、“guiding of”(1名)とする回答も見られた。前半の3語は「目的地・目標物に向かうこと」を、そして後半の3語は「目的地・目標物ま

で案内すること」を示唆していると解釈できる。これらは現在位置を測定するという GPS の機能と大きく関連しており、アンケート用紙で示したカーナビゲーションの実質的な機能と結びついている。このことから G を上記の 6 語と解釈したのは、GPS の機能に着目したことに加え、提示されたカーナビゲーションのイラストの影響も大きいと推測できる。

次に P に関して最も特徴的なのが、表 10 に示す通り場所や位置を意味する語句が多く挙げたことである。括弧内の数字は回答数である：

1. positioning (9)	2. position (20)	3. positional (1)
4. place(s) (27)	5. placing (1)	6. placement (3)
7. point(s) (18)	8. pointing (1)	9. pointed (1)

表 10 P の回答として挙げた場所・位置を示す語

正答となる“positioning”以外にも 8 種類の場所・位置を示す語が回答として見られ、回答数は合計 81 回となる。これは全体の約 56.3%であり、回答者 144 名から無回答者 31 名を除いた 113 名を母数として再計算すると約 71.7%の回答者が場所・位置に関する語を挙げていることになる。上記でも述べたように GPS が「地球上の現在位置を測定する為のシステム」ということから、多くの回答者は P が場所・位置を示す語であること自体は理解しているものと推測できる。

S が表す語として最多だったのが正解の語である“system”で、55 名（全体の約 38.2%）の回答者がいた。これ以外で特徴的な例が「探す・探索する」を意味する“search”（16 名）とその派生語である“searcher”（4 名）と“searching”（2 名）である。22 名の回答者が“search”とその派生語を回答として挙げていることから、回答者が GPS の機能を利用した「場所の探索」に関する語が入っているだろう、と推測したのではないかと考えらる。しかし前述したように、回答者に示したカーナビゲーションのイラストに誘導された可能性も否定できない。

最後に UFO の各文字への回答を分析しながらその特徴を考察する。初めに U に関して最も特徴的なのは、回答者の多くが「未確認飛行物体」の「未確

認」という語を表そうと試行錯誤した形跡が見られることである。これらの語は表 11 で示す。中には単語として存在しないものもあるが、その多くは形容詞化のための接尾辞“-ed”を付与し忘れているか、逆に不必要に形容詞化に必要な接尾辞の“-ing”や“-ed”を付与しているケースである。括弧内の数字は回答数である：

1. unconfirmed (3)	2. uncertain (4)	3. uncertained (1)
4. uncertificated (1)	5. undeclared (1)	6. undefine (1)
7. undefined (2)	8. undetected (1)	9. undiscover (1)
10. unfinding (2)	11. unfound (7)	12. unfounded (1)
13. unfounding (1)	14. unidentified (12)	15. unidentify (2)
16. unknow (1)	17. unknown (18)	18. unknowned (1)
19. unrecognize (1)	20. unrecognized (2)	

表 11 「未確認」を表す為に挙げた「語」

回答として挙げた「語」は 20 種類もあり、解答総数は 63 である。これは全体の約 43.8% となるが、回答者 144 名から無回答者 45 名を除いた 99 名を母数として再計算すると約 63.6% の回答者が試行錯誤の上「未確認」を表す「語」を回答として挙げている。その中で最も多く挙げた回答が“unknown”で、比較的連想しやすい語と言えるだろう。

次に F に関して見ると、54 名の回答者が正答となる“flying”と答えている。これは全体の 37.5% にあたるが、無回答者 45 名を除いた 99 名を母数として再計算すると、約 54.5%、つまり 2 人に 1 人が“flying”と答えたことになる。

最後に O に関して、76 名の回答者が正答となる“object(s)”と答えている。これは全体の約 52.8% にあたるが、母数を 99 名として再計算すると約 76.8% の回答者が“object(s)”と答えたことになる。

5 分析・考察のまとめと今後の研究計画

今回のパイロット・スタディでは、6 つの頭文字語 (CM、SD (card)、TV、

DVD、GPS、UFO) が何の略か、どれだけ正確に認識しているかを調査した。またそれぞれの頭文字語が何の略か分からない場合、各頭文字語（及び各文字）に対する解釈に何らかの傾向は見られるのか、についても分析・考察を行なった。4 節で 6 つの頭文字語を分析・考察してきた結果、次のようにまとめることが出来る。

(1) 頭文字語の分析・考察のまとめ

- ① TV を除き、頭文字語が何の略かを正確に理解している回答者は少ない傾向にある。
- ② 語彙による差はあるものの、頭文字語の一部を正しく理解している傾向が見られる。
- ③ 頭文字語が示す対象物の形状や性質、機能といった特徴を示す語を各文字に対して回答する傾向がある。

今回のパイロット・スタディでは、上記 3 点の傾向が見られたが、まだ疑問点が残る。まず、TV とそれ以外の語での理解度が極端に違う理由は何であろうか。可能性として、英語学習において TV が何の略か知る機会があったが、それ以外の語ではそのような機会がなかった、ということが考えられる。実際筆者が中学生で初めて英語を学んだとき、“TV = television”を学習した（または教科書や別の資料で見た）記憶がある。しかし、アンケート調査の参加者が実際にそのような機会があったかどうか定かではないし、他の語に関してそのような機会が全くなかったとも言い切れない。

また今回は大学生を対象として調査を行なった為、大学生に「馴染みのある」と思われる頭文字語を用いたが、一般的に各語への理解度がどの程度かを正確に把握していた訳ではない。それを少しでも解消し、出来るだけ誤解が生じないよう 2 節で説明した通り各語に写真・イラストも添えてアンケート調査を行なった。しかし、GPS のイラストのように、実際提示したイラストがその語を表すのに適していたかどうか疑問が残るケースもある。実際イラストに影響されたのではないかと、と思われる回答も見られたことは 4.3 節で述べた通

りである。また写真・イラストを添えて質問する方式では、写真・イラストで表すことのできないような抽象的概念を示す頭文字語の理解度の測定や誤認に見られる法則の分析は難しくなる。

今後の研究では、上記の問題を解決する方向で進めていく必要がある。まずアンケート調査の回答をまとめた後で、可能な限りフォローアップ・インタビューを行ない、アンケート調査では確認出来なかった考察に必要な情報を入力する必要があるだろう。またアンケート自体も改善し、より正確なデータが得られるよう工夫する必要がある。1つの案として、頭文字語をイラスト付きで質問するだけではなく、頭文字語を文章内に入れその語が何の略かを問うこともできるだろう。特にこの方法なら、イラストで表すことが難しい抽象的な概念の頭文字語についても尋ねることができる。また、対象となる語に馴染みがあるかどうかとも回答結果を大きく左右すると考えられる為、その点も事前に確認するかアンケート調査時に確認できるようなアンケートが作成できればさらに良い。

また2節でも触れたが、アンケートの回答者の特性（年齢や英語学習歴、普段の英語使用時間や回答者の英語のレベル、回答者が大学生の場合は専門分野、等）とアンケート調査の結果に何らかの相関が見られるかと言った点も分析・考察していく必要があるだろう。

さらに（1）の③にまとめたような傾向に関しては、今後更なる詳細な分析・考察が必要だと考える。特に対象物のどの特徴に注目する傾向があるのか、という点は非常に興味深いものである。これは商品名などのネーミングの法則と関連している可能性があると考えている。文献調査をさらに進めて、今回のパイロット・スタディから分かった傾向や特徴の裏付けとなる根拠についても提示できるようにしたいと考えている。

註

- ¹ アンケート調査用紙作成では、当時大学院生の幸知キーシャンドウ真希さんに協力していただきました。特に調査する語彙の選定時に調査対象となる大学生と同世代であることから、貴重なアドバイスを頂きました。心より感謝致します。
- ² 第一言語に関して、実際のアンケート調査では「母国語」という用語を使用したが、調査後ある学生の回答から誤解を生じさせたことが分かった。本人にフォローアップ・インタビューを行なうことで、本人の第一言語と第二言語の状況を確認することができた。
- ³ 今回はパイロット・スタディということで、アンケート調査に協力してくれた参加者全員について分析・考察する。
- ⁴ VHS video と DVD との関連性に関する議論に関しては、兼本円教授から貴重な助言を頂きました。心より感謝致します。
- ⁵ 他に“geology”(1名)と“geological”(3名)という回答も出た。可能性として“geography/geographical”との混同が考えられ、そうした場合「地理的」な内容を示す回答数は40となり、“global”の回答数と合計すると69となる。

参考文献

- Liles, Bruce L. (1975). *An Introduction to Linguistics*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
- 大石強 (1988) 『現代の英語学シリーズ<第4巻> 形態論』 東京：開拓社。
- 篠崎晃一 監修 (2006) 『アルファベット略語便利辞典』 東京：小学館。
- 広永周三郎 (1984) 『英語略語辞典』 東京：研究社。
- 堀内克明 監修 (2013) 『現代用語の基礎知識 カタカナ外来語略語辞典 第5版』 東京：自由国民社。
- 南出康世 編集主幹 (2014) 『ジーニアス英和辞典 第5版』 東京：大修館。
- 「DVD の使用について」よくあるご質問 Maxell ホームページ
https://www.maxell.jp/faq/dvd-faq01_01.html (2021年9月23日閲覧)。

DVD の名前の由来は何ですか。 BohYoh.com

<http://www.bohyoh.com/DVD/FAQ/FAQ00014.html> (2021年10月26日閲覧)。

パソコンの選び方と買い方 <https://pcinformation.info/optical-drive/dvd-origin-name.html> (2021年9月23日閲覧)。